

日蓮大聖人御書全集

くろうたろうどのごへんじ

九郎太郎殿御返事

だいまくぶっしゅ こと

(題目仏種の事)

新版
1884
〜
1885

くろうたろうどののごへんじ だいもくぶつしゅ こと

九郎太郎殿御返事（題目仏種の事）

こうあんがんねん がつ にち くろうたろう なんじようどの えんじや

弘安元年（'78）11月1日＊ 九郎太郎 〈南条殿の縁者〉

芋 いちだ 栗 焼 米 薑 た そうら

いも一駄・くり・やきごめ・はじかみ、給び候いぬ。

深 やま 芋 作 ひと 栗 生

さては、ふかき山には、いもつくる人もなし。くりもなら

薑 生 焼 米 見 そうら

ず、はじかみもおいず、ましてやきごめみえ候わず。たと

栗 生 猿 残 家 芋

いくりなりたりとも、さるのこすべからず。いえのいもは

作 ひと 作 ひと 憎 給 そうら

つくる人なし。たといつくりたりとも、人にくみてたび候

高 やま 来 そうら

わず。いかにしてか、かかるたかき山へはきたり候べき。

やま 見 そうら 高 次 第 下

それ、山をみ候えば、たかきよりしだいにもへくだれ

海

見そうら

浅

次第

深

よ見

り、うみをみ候えば、あそきよりしだいにふかし。代をみ

そうら さんじゅうねん にじゅうねん じゅうねん ごねん し さん に いち

候えば、三十年・二十年・十年・五年・四・三・二・一、

しだい 衰 ひと こころ 世

次第におとろえたり。人の心もかくのごとし。これはよの

末 そうら やま 曲 木 留 野

すえになり候えば、山にはまがれるきのみとどまり、のに

低 草 生 世 賢 ひと 少

はひききくさのみおいたり。よにはかしこき人はすくなく、

果 無 者 多 ぎゅうば 父 知 とうよう はは

はかなきものはおおし。牛馬のちちをしらず、兎羊の母を

弁

わきまえざるがごとし。

ほとけにゆうめつ にせんにひやくにじゅうよねん よ 末

仏御入滅ありては二千二百二十余年なり。代すえになり

ちじんしだい 隠 やま 下 草 低

て、智人次第にかくれて、山のくだれるごとく、くさのひき

似

ねんぶつ

もう

戒

持

ひと

多

きにいたり。念仏を申し、かいをたもちなんどする人はおお

ほけきよう

恃

ひと

ほし

おお

けれども、法華經をたのむ人すくなし。星は多けれども、

たいかい

照

くさ

おお

おおうち

はしら

大海をてらさず。草は多けれども、大内の柱とはならず。

ねんぶつ

おお

ほとけ

な

みち

かい

たも

念仏は多けれども、仏と成る道にはあらず。戒は持てども、

じようど

詣

たね

な

なんみようほうれんげきよう

しちじ

浄土へまいる種とは成らず。ただ南無妙法蓮華經の七字のみ

ほとけ

たね

そうら

こそ、仏になる種には候え。

もう

ひと

嫉

もち

こうえのどの

しん

これを申せば人はそねみて用いざりしを、故上野殿、信じ

たま

ほとけ

な

たま

おのおの

まつ

給いしによりて仏に成らせ給いぬ。各々はその末にて、こ

おんこころざし

遂

たも

りゆうま

付

蜚

せんり

飛

の御志をとげ給うか。竜馬につきぬるだには千里をとぶ、

まつ 懸 薦 せんじん 攀 もう おのおの しゆ

松にかかれるつたは千尋をよずと申すは、これか。各々、主

みこころ

の御心なり。

土 餅 ほとけ くよう ひと おう ほけきよう

つちのもちいを仏に供養せし人は王となりき。法華経は

ほとけ 勝 たも ほう くよう たま

仏にまさらせ給う法なれば、供養せさせ給いて、いかでか

こんじよう りしよう 与 ごしよう ほとけ 成 たま

今生にも利生にあずかり、後生にも仏にならせ給わざる

うえ 身 貧 下 人 さんが 煩

べき。その上、みひんにして、げにんなし。山河わずらい

こころ 顕 色

あり。たとい心ざしありともあらわしがたきに、いまいろを

たも 知 定

あらわさせ給うにしりぬ、おぼろけならぬことなり。さだめ

ほけきよう じゅうらせつ 守 たま 頼

て法華経の十羅刹まぼらせ給いぬらんと、たのもしくこそ

そうら

こと尽

候え。事つくしがたし。恐々謹言。

きようきようきんげん

じゅういちがつついたち

十一月一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

くろうたろうどのごへんじ

九郎太郎殿御返事

故上野殿

これにつけても、こうえのどののこそこそ、おもいで

そうら

られ候え。

思出